



賢木門

金

毘羅さんの参道には、驚くほど人がいない。そろそろ黄昏時で、土産屋が全て店仕舞いしているからだろう。日没間近ではあるが、とりあえず行けるところまで石段を登ってみることにする。本殿までは約八〇〇段もあるが、登っては、平らな道、登っては、平らな道なので大してきつくない。謎の回復力を見せた同行者もやる気満々だ。ほぼ中間地点の大門前で、後ろをふりかえるとなかなかの景色だ。山の中腹にあるので、樹木の香りもすがすがしく、神意を感じたような錯覚におちいる。金比羅さんがこの地に鎮座した理由がわかる気がした。昼間の雑踏の中では、こんないい気分にはならなかったろう。

ところで石段を八割がた消化したあたりに、正面に唐破風、側面に千鳥破風を擁する松皮葺屋根の門がある。正面に掲げられた扁額には「賢木門」とあるが、これは「さかきもん」または「さかきのもん」と読む。現在の門は、明治十二（一八七九）年に建替えられたものだが、それ以前の門は今に残る棟札によって、四国を制した戦国の雄・長宗我部元親が天正十二（一五八四）年に寄進したものだと思われる。その門の柱の一本が「逆柱」になっていたことから、俗に「逆木門」と呼ばれていた。門を新

しくするとともに、名称も俗称の音を踏襲して「賢しい」の字をあてたらしい。この門については次のような伝説がある。

天正年間、長宗我部元親は四国全土を我が物とするため兵を起した。その勢いはすさまじく、諸州を次々と制圧し、神社仏閣の多くが焼かれた。天正十二年、元親は金刀比羅宮の北隣大麻山に陣を取ったが、その夜、乱心したか草木が敵兵に見えて大混乱におちいった。老臣たちは神罰だと思い、賢木門の前身である仁王堂を建てたが、あまりにも建築を急いだために柱の一本が逆さまになったという。

さて、「土佐史談」四七卷（一九三四年）に掲載された郷土史家・岡田唯吉氏の論文によると、元親の寄進した仁王堂の瓦には、天正十二年正月に鮑始め、六月に成就と刻まれている。しかし、棟札には「上棟奉建立・天正十二年十月九日」とあり、上棟式の日付がわかるので、瓦に刻まれた「六月成就」とは瓦大工が自分の仕事、つまり瓦造りを終えた日になろうか。もし、そうならば、正月の着工から上棟式まで十カ月もかかっていたことになる。慌てていたとは言えないだろう。

古来、日本には「盛りを過ぎれば、衰えるのみ」という考え方があり、吉田兼好の「徒然草」でも「何

事も完璧に仕上げるのはよくない。…内裏を造る際にも必ず造り残しをする」と書かれている。このような思想による逆柱だったのでなからうか。

賢木門を過ぎて、本殿にたどりつくと、丸亀平野が眼前に広がっていた。あと六〇〇段ほど登れば、奥社に行けるのだが、暗くなつたし、明日の満濃池に向けて体力を温存しなければならぬ。またの機会に持ち越して下山することにした。（つづく）



賢木門

【交通】賢木門は金刀比羅宮の参道石段を642段登ったところにある。

東日本建設業保証株式会社
建設産業図書館
江口知秀
Tomohide Eguchi